

露呈するフィクション ～つくられた綻び～

東京藝術大学大学院美術研究科博士後期課程美術専攻日本画領域

1321901 大嶋直哉

本論文は、自作品「オブスクラ」シリーズにおける、自身で構成した空間を絵画化させる制作行為について論じたものである。

私は対象を撮影し、アクリル板にモチーフとなる写真の印刷物を貼付(コラージュ)、それに照明を当てた空間を撮影することでイメージ化させ、それをもとに作品を制作する。コラージュとは、写真や文字などさまざまなイメージの印刷物を切り抜き、画面上に構成する手法である。このような表現を用いることによって2次元と3次元を往来し、最終的に自らの手で描いて絵画として提示する。

私は絵画の「フィクション」性に興味を抱いており、ものを作り出すこと、そしてそれを明かす態度に面白さを感じ、これを制作における動機としている。写真を用いるのは、「断片」や「均質化」という要素が、モチーフの意味内容などを軽いものにし、そのことが自身の行ないたいことと合致し、意義があると考えからである。コラージュは3次元(あるいは2.5次元)の物体によって、本来2次元の絵画を3次元化していることを露呈する。それゆえに私は、コラージュ的表現にもう一層を加え、重層的な絵画表現を企図している。2次元・3次元という2項を往来する重層的な構造を生み出し、それが作り物であることを明かす表現を作品化しようとしているのである。

3次元の世界を2次元の画面上へとうつすミメシスな行為は、絵画における根源的な目的の一つであるといえる。私はこれまで風景を主に描いてきたが、関心の対象は、実際の風景を写し取ることよりも、次第に絵画空間の構成や演出、そして「絵画」そのものへと移っていった。その中で、光を当てた表現に興味をもつようになり、可視化、非日常的な情報の提供に魅力を感じた。論文の執筆にあたり、これまでの制作過程の変遷を辿るなかで、私はライトによる演出と、コラージュ的な構成が、自身の制作の二つの基本軸であることを認識した。

またその制作過程について、本論文では、アクリル板に印刷物を貼る行為を「生ける」、アクリル板を重ねることで生じる空間を「浅い」空間、そして扱うイメージや表出するイメージを「軽い」イメージとする。「生ける」は、イメージを空間的に構成し生きているように見せる点が、生け花に近いと感じたことから借用している。「浅い」は、生ける行為によって生じる空間、「軽い」は、切り抜くことで切断されたイメージや、そうした性質をもつものを指す。

私にとって絵画とは、この「浅い」空間の中で発生するフィクションであり、一方でそのフィクションを強調することで、「軽い」イメージとして楽しむものであると考える。ただこの表現によって、批判的な意図を含むものでないことを明言しておく。複雑に「生け」た「軽い」空間を通して、絵画として了解を得られる形とし、その上でイメージを楽しむことが私の創作行為の目的である。

第1章「イメージの構築」では、自身の原点から制作過程、「生ける」行為の機能について、近似するコラージュ表現と比較しながら、これまでの制作の変遷を辿った。第1節「構築」では、自身の具体的な制作方法を説明しながら、絵画化の目的と貼付の表現を中心に述べた。第2節「重層と往来」では、コラージュ的表現での「重層」と「往来」の機能について自作品との関係を述べた。第3節「変遷」では、自身のこれまでの制作の変遷を、きっかけとなったモチーフ、ライトによる演出、その効果について説明した。

第2章「「軽い」イメージ」では、「軽い」イメージを用いて絵画化することについて述べた。第1節「素材」では、写真をモチーフとして扱う理由と特徴について述べた。第2節「意味」では、「軽さ」を用いる根拠を明らかにした。第3節「絵画化」では、最終的に絵画として提示することについて、自身の考えを述べた。

第3章「オブスクラ」では、第1章、第2章を踏まえ、提出作品「オブスクラ」シリーズを中心に自作品の解説を行なった。